

北海道登別青嶺高等学校

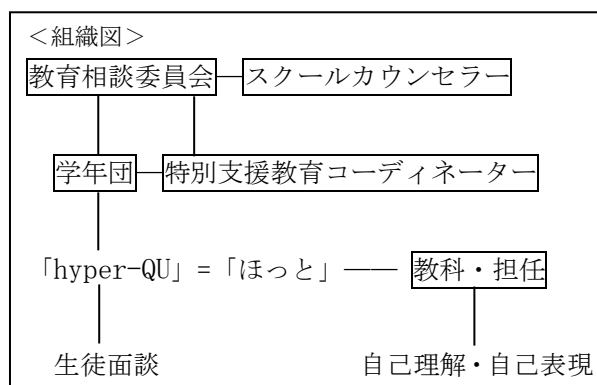
課 程： 全日制
学 科： 普通科
生徒数： 462名

1 取組の特徴

- 1 「スマートフォンの預かり指導」等、校内における生徒同士のコミュニケーションの機会を増やすための取組をはじめとした生徒指導の強化を図るとともに、授業において、ペアワーク及びグループワークを活用した言語活動や表現力の育成を図る取組の充実
- 2 「hyper-QU」や「ほっと」等のアセスメントを活用し、学級経営及びスクールカウンセラーによる個別相談と情報共有による教育相談体制の確立

2 取組のねらい

- 1 良好な人間関係の構築
- 2 「hyper-QU」及び「ほっと」の分析によるきめ細かい生徒対応と生徒指導の取組の検証
- 3 スクールカウンセリングによる個別の生徒の困り感への対応
- 4 自己理解・自己表現を高める取組の推進



3 取組の経過

- 教育相談委員会の月例開催
- スクールカウンセラーによる個別カウンセリング（年間20回）

- 【4月】宿泊研修における絆づくり（1学年）
- 【6月】「hyper-QU」実施及び分析（全学年）
- 【8月】「ほっと」実施及び分析（1学年）

- 【10月】外部講師によるマナー講座（3学年）
- 【11月】「ほっとプラス」実施（全学年）
デートDV出前講座（ロールプレイ）（1学年）
- 【11月】職業調べと、クラス・学年発表による自己表現力スキルアップ（1学年）
- 【2月】「ほっとプラス」実施（1・2学年）

4 取組の内容

- 1 外部講師によるマナー講座（ペアリングによるコミュニケーション活動）

(1) ねらい

基本的なビジネス（接遇）マナーについての学習を通して、コミュニケーション能力の育成を図るとともに、好感の持たれる身だしなみや挨拶、話し方等についての理解を深める。

(2) 対 象 3学年

(3) 内 容

ビジネス（接遇）マナー講座の受講

(4) 成果等

基本的なビジネスマナーの知識を身に付け、その上で他者とコミュニケーションを図る上で気を付けるべき身だしなみ、挨拶、話し方等への理解を深めることができた。



4 取組の内容

2 宿泊研修における絆づくり

(1) ねらい

自己を知り他者を理解することによって、思いやりや協調性を高めるとともに、コミュニケーション能力の育成を図る。

(2) 対 象 1 学年

(3) 内 容

各ホームルーム及び学年全体でのコミュニケーショントレーニング

(4) 成果等

各ホームルーム及び学年でのコミュニケーショントレーニングを通じ、協調性が高まるとともに、コミュニケーションの大切さを理解することができた。



5 次年度に向けて

1 成果

(1) 中途退学者数及び不登校生徒数の推移

保護者と連携した継続的な指導によって、中途退学、不登校に繋がる要素のある生徒が、恒常的に相当数存在するにも関わらず、意欲を持って学校生活を送る生徒が増えている。

(2) その他の指標による評価

「hyper-QU」によるクラス分析では、全クラスで「学校生活意欲総合点」が全国平均を上回っている。結果分析により、特別な支援を必要とする生徒への個別カウンセリングを実施している。

(3) 「ほっと」実施により把握した生徒のコミュニケーションスキルの概況

「ほっと」による生徒のコミュニケーションスキルの概況は、全道平均を上回り、社会的スキルがバランスよく身に付いている。特に、「関係維持因子」が高く、高い規範意識に基づき、他者と良好な関係を保つコミュニケーションスキルが構築されている。

(4) 生徒の変容した姿

例年、年度末に実施している生徒アンケート（４点満点）の結果を昨年度と比較してみると、「私は友人との人間関係に満足している」の項目において 3.26→3.33、「本校はスマートフォン等に頼らないコミュニケーション力育成に努めている」の項目において 3.14→3.18 となっており、本取組が確実に実を結んでいる。

2 課題

(1) 近年、保健室利用者が増加傾向にあったが、今年度は減少した。しかし、心に悩みを抱え来室する生徒は固定しており、継続的に個別カウンセリングを行う必要がある。

(2) 保護者との連携の在り方について、特に特別な支援に関わる場面では、効果的な連携を図るために慎重に対応する必要がある。

3 次年度に向けて

(1) 教育相談を通じた生徒理解と規範意識の醸成について学校全体で取り組むために、教育相談委員会を中心に校内研修を実施し、共通認識を図る。

(2) 学年、担任を中心に、保護者との連絡を密にしながら、保護者懇談、茶話会等の実施により連携を深めていく。

北海道追分高等学校

課 程： 全日制
学 科： 普通科
生徒数： 108名

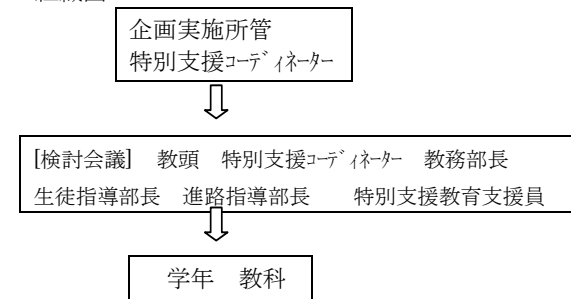
1 取組の特徴 個に応じた指導とコミュニケーション力を高め自己有用感を育む取組

- 1 スクールカウンセラー（以下SC）、パートナーティーチャー（以下PT）及び特別支援教育支援員を交えた事例検討会により、個々の生徒に対応した支援を行う。
- 2 発表力やコミュニケーション力を身に付ける教科指導を行う。
- 3 リーダー研修により要となる生徒のスキルアップを図り、ピアサポート活動による温かい学級集団づくりを実現する。
- 4 異年齢集団との交流学习やボランティア活動を推進し、自己有用感を高める取組を行う。

2 取組のねらい

- 1 個に応じた指導・支援の充実
- 2 教科指導の工夫
（言語活動の充実やアクティブラーニング・チームティーチングを取り入れた授業）
- 3 リーダーの育成
（生徒会活動の充実・リーダー研修）
- 4 自己有用感を育む体験活動
（ボランティア活動や異年齢集団との交流）

<組織図>



3 取組の経過

※SV～特別支援教育スーパーバイザー

- | | |
|--|--|
| <p>4月 リーダー研修会
（生徒会役員学級代表）</p> <p>5月 特別支援教育校内研修会
（PT参加）</p> <p>6月 リーダー研修会
（生徒会役員・学校祭実行委員）
職場体験学習（2年）
「ほっと」、「アセス」実施
ボランティア活動（町内小学校運動会）</p> <p>7月 職場体験学習報告会（2年）
学校祭係活動</p> <p>8月 ボランティア活動（夏祭り）</p> <p>9月 異年齢集団交流・ボランティア活動
（秋祭り）
特別支援教育校内研修会
（SV、PT参加）</p> | <p>10月 宿泊研修・異年齢集団交流
リーダー研修会・SC集団カウンセリング
Web会議
（「ほっと」、「アセス」結果による学級支援について）</p> <p>11月 見学旅行・生徒会フォーラム参加
ボランティア活動
（福祉施設文化交流会）</p> <p>12月 特別支援教育校内研修会
見学旅行報告会・体育大会学級活動</p> <p>1月 学習成果発表会・年度末反省会議
「ほっと」、「アセス」実施</p> <p>2月 ボランティア活動
（町内ロビーコンサート）</p> <p>3月 リーダー研修会
（生徒会・学級代表・部長）</p> |
|--|--|

4 取組の内容

1 特別支援教育校内研修

(1) **ねらい** 「ほっと」、「アセス」の結果を基に学級集団の傾向と個々の生徒の学校生活満足度を確認するとともに、専門家（PT、SC、SV、特別支援教育支援員）を交え生徒の様子について情報交換し、学級集団と生徒一人一人へのアプローチの方法を検討・実践する。

(2) **対 象** 教員、PT、SC、SV、特別支援教育支援員

(3) **内 容**

ア 特別支援情報交換会議・特別支援連絡会議・特別支援教育校内研修

4月 7日 情報交換会議 中学校訪問結果から入学生の様子を中心に情報交流

5月 24日 連絡会議・校内研修（PT、支援員参加）

支援内容について協議、今年度の支援対象生徒について

9月 27日 校内研修（SV、PT参加）

支援内容について協議、高等学校における合理的配慮、通級指導について

12月14日 校内研修（PT、支援員参加）支援内容の交流

イ Web 会議

9月 25日 教育カウンセラーと1、2年学級担任との面談

「ほっと」及び「アセス」の結果を基に、学級集団や気になる生徒へのアプローチについて助言

(4) **成 果** 学級及び個々の生徒状況について理解が深まり、個に応じた指導の充実につながった。

2 発表力やコミュニケーションスキル向上を意識した教科指導・ボランティア活動の推進

(1) **ねらい** 進路実現に向け、外部の方との交流や学習内容のまとめとして発表場面を意識的に設定し、各自の表現力の向上を図る。

(2) **対 象** 全学年

(3) **内 容**

ア 1年生自己紹介プレゼンテーション情報授業

イ 2年生職場体験学習と報告会

ウ 2年生見学旅行報告会

エ 3年生選択授業と学習成果発表会

選択体育 町内パークゴルフ協会員との交流

福祉 町内養護老人施設・保育園・小学校での交流学习

オ 町内施設でのボランティア活動

(4) **成 果** 発表場面や異年齢交流をとおり、自己有用感が高まり各行事やボランティア活動にも意欲的に参加する生徒が増えた。ボランティア参加延べ人数 133 人



3 校内リーダー研修、SCによる集団カウンセリング

(1) **ねらい** 相手の意見を聞くことや、自らの意見も伝えることなどのコミュニケーションスキルを高め、クラスや学校生活の中で仲間強化や支援援助のできるリーダーを育成する。

(2) **対 象** 生徒会執行部・学級代表、1、2年生

(3) **内 容** リーダー研修4回実施、SCによる集団カウンセリング各1回

第1回 自己紹介・他己紹介・積極的な聴き方

第2回 学校祭前 ロールプレイ(対立の解消・課題解決のステップ)

第3回 対人関係の特徴を知ろう(エゴグラム)・課題解決グループワーク

第4回 1年のまとめ、新入生を迎える準備会議

SC集団カウンセリング「コミュニケーション上手になってストレスを減らそう」

(4) 成果(第3回研修における生徒の感想)

- ・自分の新しい面を発見できた。変えなければならない点を明確に知ることができたのでこれからの生活に活かしていきたい。他者紹介の中で他のメンバーのことを知ることができてよかった。
- ・エゴグラムでは、予想外の結果が出たけど自分の良い点悪い点を知ることができ、インタビューでは、相手や他の人たちのことを知ることができて良かった。

5 次年度に向けて

1 成果

(1) 中途退学者数及び不登校生徒数の推移

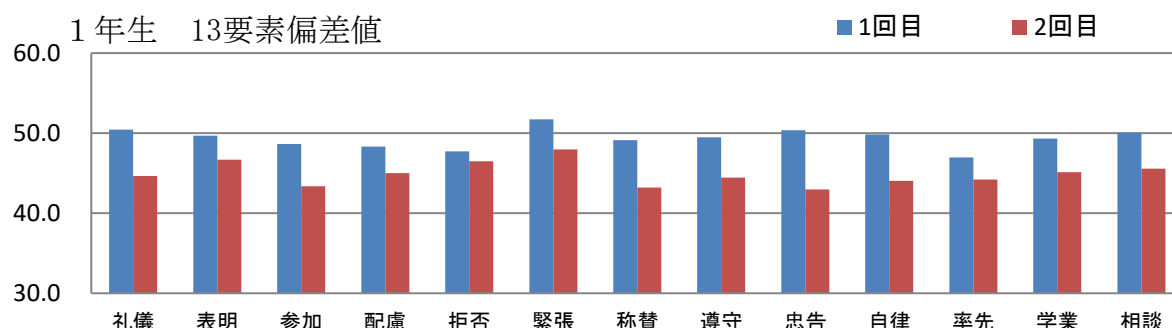
中途退学者数については、ティームティーチング(習熟度別学習)や特別支援教育支援員の教科補助により、個々の生徒に目が行き届くようになったため、プログラム開始時と比較すると減少している。また、不登校生徒数についても減少しており、スクールカウンセラーによる定期面談を実施し生徒自身の自己理解を促すとともに、教科やボランティア活動による異年齢集団との交流により、自己有用感が高まり他者を思いやる気持ちの育成を図る取組が効果を示していると考えられる。

(2) その他の指標による評価

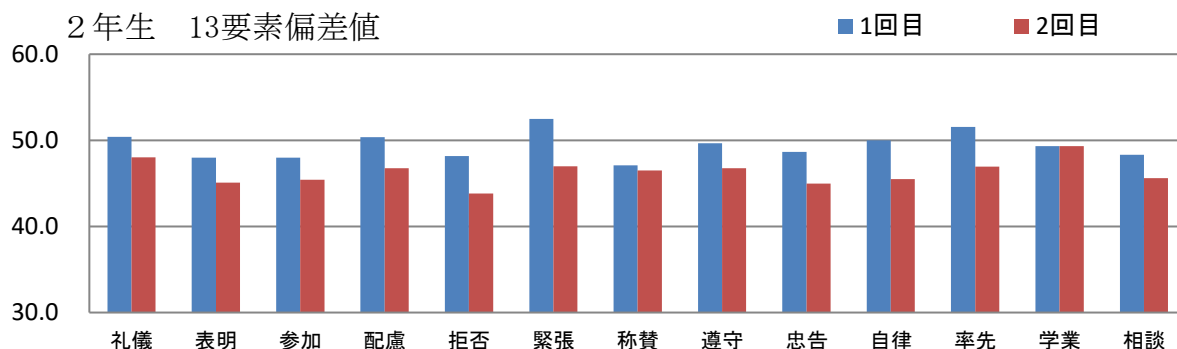
生徒会・ボランティア同好会メンバーが中心となり、各活動への参加を呼びかけたことにより、参加延べ人数が28年度120人、29年度133人と2年連続で100人を超え、意欲の向上が見られる。

(3) 「ほっと」実施により把握した生徒のコミュニケーションスキルの概況

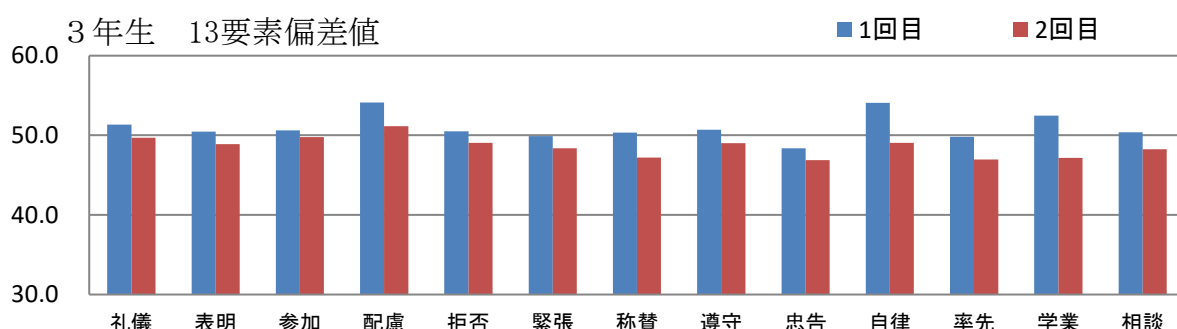
1年生 入学当初は、緊張がありクラスの友人と話すことに抵抗を示していたが、ホームルーム活動や各教科でコミュニケーショントレーニングを意識した活動を行ったため、6月実施結果は、4因子得点では、関係維持69.1・仲間強化58.1・自己統制62.0・援助要請56.9と前向きな結果となった。



2年生 入学当初より女子の人間関係に課題があるクラスであったが、2年生になり学校の中核となる意識が高まり、率先の項目が高くなっている。4因子では関係維持69.5・自己統制62.3と高い反面、仲間強化は55.5から48.0と下がり、課題となっている。一方、「アセス」における支援対象生徒の友人サポート感や生活満足感には上昇が見られた。



3年生 多様な生徒が多い学級であったが、担任の助け合いと支え合いを中心に据えた指導と教科担任の支援により4因子得点では、関係維持 75.2・仲間強化 60.1・自己統制 68.2・援助要請 60.1 と他学年よりも高い数値であり、3年間の成長がうかがえる。1月実施結果では、卒業試験や就職先でのことを意識したためか、自己に厳しく回答する生徒もあり、前回より低い結果となった。



(4) 生徒の変容した姿

ホームルーム担任及び教科担任が、自己表現力を育成するための発表の場や異年齢交流の機会を積極的に取り入れたことにより、自己有用感が高まり、1年生の部活加入率が他の学年を上回った（1年：55%、2年：41%、3年：32%）。また、年間のボランティア参加人数が76人から99人に増えるなど、一層前向きに学校生活に取り組む姿勢が見られるようになった。

生徒会執行部・学級代表・部活動部長や学校祭係代表など、学校内で要となる生徒を対象に、「校内リーダー研修」や「ピアサポートトレーニング」を継続的に実施するとともに、アクティブラーニングによるグループ学習やコミュニケーションスキルアップを意識した教科指導の実践により、校内全体に他者を思いやる姿が一層見られるようになった。

2 課 題

- (1) 年々増加傾向にある支援が必要な多様化する生徒へのフォローアップ体制を改善する必要がある。
- (2) 「アセス」や「ほっと」結果の分析と要支援領域生徒への対応と学級集団の4因子の上げを図る必要がある。

3 次年度に向けて

- (1) 特別支援委員会及び教育相談委員会の活動内容の明確化と委員会の定例化（月1回）
- (2) 「アセス」や「ほっと」分析結果についての研修と早期活用と、生徒実態調査結果の分析や要支援対象生徒への対応について、全体での研修や検討時間を確保する。

北海道鵠川高等学校

課 程： 全日制
学 科： 普通科
生徒数： 161名

1 取組の特徴

1 「クラスづくり」の取組

コミュニケーションスキル向上のためのトレーニングや講話、人間関係づくりを支援する集団カウンセリングを定期的に実施している。

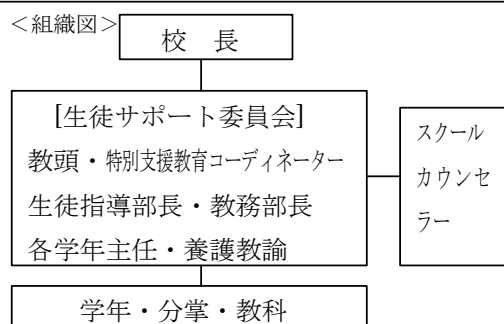
今年度より、北海道医療大学の御協力のもと、コミュニケーションスキルトレーニング（以下CST）を中心とした集団づくり、個に応じた指導の在り方の検討等を行っている。

2 充実した教育相談活動

スクールカウンセラー（以下SC）による個別カウンセリング、担任や学年団による定期的な面談、全校生徒対象の教育相談を実施している。

2 取組のねらい

1・2学年を中心に、「クラスづくり」と称した取組を継続的に実施することで、コミュニケーション能力や人間関係を形成する力を向上させるとともに、校内の教育相談活動を充実させることにより、不登校・中途退学・いじめ等の問題の未然防止及び早期対応に取り組む。



3 取組の経過

【4月】

- ・「ほっと」によるアセスメント
- ・2学年クラスづくり①
- ・1学年宿泊研修における集団カウンセリング

【5月】

- ・2学年クラスづくり②③
- ・中高合同ボランティアにおける実践

【6月】

- ・校内教育相談
- ・2学年クラスづくり④
- ・体育大会における実践

【7月】

- ・2学年クラスづくり⑤
- ・学校祭における実践

【8月】

- ・1学年クラスづくり①※道医療大富家先生によるCST

【9月】

- ・2学年クラスづくり⑥
- ・1学年クラスづくり②

【10月】

- ・1学年クラスづくり③
- ・2学年クラスづくり⑦
- ・校内教育相談
- ・インターンシップにおける実践

【11月】

- ・2学年クラスづくり⑧
- ・1学年クラスづくり④
- ・「ほっと」によるアセスメント

【12月】

- ・見学旅行における実践
- ・体育大会における実践
- ・3学年絵本セラピー

【1月】

- ・2学年クラスづくり⑨
- ・1、2学年絵本セラピー

【2月】

- ・2学年クラスづくり⑩

その他の取組… 月例全校集会（毎月初日付近に実施）
SCによる生徒・保護者等面談（月1～2回）
パートナーティーチャー（以下PT）による授業参観・助言（年3回）

4 取組の内容

【コミュニケーションスキルアップトレーニング（CST）】（月1回、LHR等の時間で実施）

・1学年クラスづくり①（8月29日） 講師：北海道医療大学 富家 直明 教授
＜ねらい＞ 生徒のコミュニケーション能力や人間関係を形成する力を向上させる取組を継続的に実施することで、不登校・中途退学・いじめ等の問題の未然防止及び早期対応に取り組む。

＜内 容＞ グループエンカウンターで「自己紹介の輪」、「共同絵画」に取り組んだ。



富家教授による説明の様子



グループで「自己紹介の輪」に取り組む様子

・1学年クラスづくり⑤（11月21日実施）

＜ねらい＞ コミュニケーションを体験的に学び基本的なコミュニケーションスキルを身に付ける。また、自分と他者との違いに気付く。

＜内 容＞ 班ごとに「クラスのよいところ」、「クラスをよくしていきたいところ」をKJ法で挙げ、それぞれ出てきた意見を最後に全体で共有した。他者の意見を認め、自分たちで主体的に学校生活をよくしていこうという姿勢が見られた。



CSTの様子



完成した意見をまとめたもの

【校内教育相談】（年2回、LHRや昼休み・放課後に実施）

＜ねらい＞ 普段の学校生活では理解することができない生徒の内面を聞き、生徒指導・学習活動・進路・学級経営の指導に役立てる。また、生徒との信頼関係を深め、生徒が教員に悩みを相談しやすい環境をつくる。

＜内 容＞ 全校生徒を全職員が面談する。結果を学年会や職員会議等で共有する。

【絵本セラピー】（各学年1回ずつ、LHRの時間で実施）

＜ねらい＞ 絵本を使用して自分の感情や考えを表現したり、他者の感情や考えを受け入れる経験をしたりすることで、コミュニケーション能力の育成を図る。

＜内 容＞ 絵本セラピストの資格を有した方に御協力頂き、生徒は様々な価値観に対して受容的になることや、共生することの大切さ、自分の意見を大切にすること等を、絵本セラピーを感じ取る。



絵本セラピーの様子



絵本セラピーで使用した絵本

5 次年度に向けて

1 成果

(1) 中途退学者数及び不登校生徒数の推移

- ・中途退学者については、昨年度と同数であるが、プログラム開始時と比較すると格段に減少しており、CST等が一定の効果を示していると考えられる。不登校生徒数についても減少しており、予防開発的な教育相談が効果を示していると考えられる。

(2) その他の指標による評価

- ・欠席日数については、現2、3学年ともに増加しているが、1学年については例年と比較しても低い水準で推移している。
- ・今年度実施した生徒による学校評価では、「本校に入学してよかったと思いますか」という質問に対して肯定的に回答した生徒が72.6%、「本校での学校生活に満足していますか」という質問に対して肯定的に回答した生徒が59.5%であった。

(3) 「ほっと」実施により把握した生徒のコミュニケーションスキルの概況

- ・4月と11月に実施した「ほっと」の結果の比較について、1学年では、「礼儀」「表明」の項目を維持、「緊張」と「学業」の項目は上昇しているが、それ以外の項目については下降傾向にある。特に「遵守」の項目については、年度当初の偏差値が60近くあったのに対し、11月の段階では50程度にとどまっており、今後改善への方策を考える必要がある。
- ・2学年では、全ての項目が下降しており、13要素偏差値も40中程にとどまっている。全体的な規律や上手なコミュニケーションの取り方等を再度確認し、指導していく必要がある。
- ・3学年では、「緊張」の項目が下回っている以外は、1回目比べて2回目の方が全ての項目で高くなっている。「自律」や「率先」といった項目が10ポイント近く上昇しており、CST等の効果が見られる。

(4) 生徒の変容した姿

- ・1年生に関しては、今年度から新たに導入した学校設定科目「むかわ学」や「チャレンジスタディ」の授業の中で、主体的に対話をする場面等を設定し、CSTで学んだことをアウトプットできるようにした結果、自分の考えや意見を持つことの大切さや、人の意見をしっかりと聞ける生徒が増加している。
- ・2、3年生においても、これまでのCSTの計画に基づく取組を継続的に実施しているほか、授業内での創意工夫や1学年のCSTにおける取組の成果を取り入れるなどして、取組の充実を図っており、その結果、他者理解に努めようとする生徒が増加している。

2 課題

- ・中学時代からコミュニケーション能力が不足している生徒が多数入学してきており、他者の気持ちに配慮した言動や行動ができていない状況が散見される。その結果として、人間関係で悩みを抱える生徒も少なくない。今後は、予防開発的な教育相談の視点から、CSTやピア・サポート活動等のより一層の充実を図るため、校内体制の整備が急務であると考えられる。
- ・年2回実施している「ほっと」を、効果的に活用できていない状況がある。各種研修会や他校における実践例を通して、教員全体がスキルアップを図り、「ほっと」の効果的な活用方法やクラス運営に活かしていける方法などを身に付け、自校での取組に還元することが大切である。

3 次年度に向けて

- ・CSTやピア・サポート活動等のより一層の充実を図るための、校内体制の更なる整備が必要である。
- ・取組の効果とその妥当性を検証するため、「ほっと」の有効活用と、他の指標による活動のエビデンス強化が必要である。
- ・教員全体に向けたプログラムの取組内容の共通理解と、全職員が一丸となって取組に当たることができる体制づくりが必要である。

北海道富川高等学校

課 程： 全日制
学 科： 普通科
生徒数： 86名

1 取組の特徴

1 生徒の実態把握

「ほっと」、「アセス」により生徒の実態を把握し、集団の特性に応じたコミュニケーション能力を育成するための取組に役立てる。

2 集団対象のコミュニケーションスキルトレーニング

スクールカウンセラーによる集団カウンセリング及び本校教員によるピアサポート研修を実施し、望ましい人間関係形成能力を育成する。

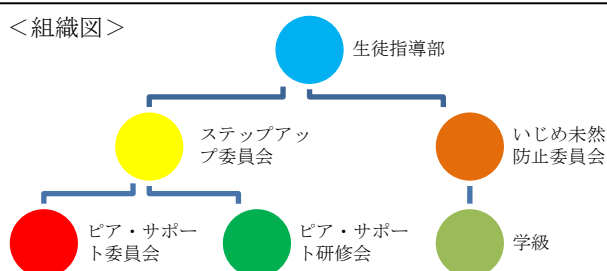
3 教育相談活動の充実

スクールカウンセラーによる個別面談、全校生徒対象の教育相談アンケートに基づいた面談、及び全教員による日常的な関わりによる教育相談活動の充実を図る。

2 取組のねらい

- 1 コミュニケーションスキルを高めることで、他者理解を促すとともに、自己肯定感の育成を図る。
- 2 思いやりや助け合い、支え合いといった人間関係の構築を図る。
- 3 コミュニケーションスキルを身に付け、今後の学校生活や卒業後の社会生活における円滑な人間関係構築に役立てる。

<組織図>



3 取組の経過

【5月】

- ・ピアサポート研修の実施（1・2学年）
- ・スクールカウンセラーによる集団カウンセリングの実施（1学年）

【6月】

- ・スクールカウンセラーによる集団カウンセリングの実施（2学年）
- ・教育相談アンケートの実施（全学年）

【7月】

- ・第1回「ほっと」・「アセス」の実施（全学年）

【9月】

- ・スクールカウンセラーによる集団カウンセリングの実施（2学年）
- ・ピアサポート研修の実施（1学年）

【12月】

- ・第2回「ほっと」・「アセス」の実施（全学年）

【1月】

- ・コミュニケーションスキルを育成するためのトレーニングの実施（1学年）

4 これまでの取組の内容

1 教員によるピアサポート研修

(1) ねらい

相手への関心を高め、望ましいコミュニケーションのとり方を体験することで、居心地のよいクラスの雰囲気づくりに役立てる。

(2) 対 象

第2学年生徒（31名）

(3) 内 容

自己紹介キャッチボール、ロールプレイ、肯定的な働きかけと否定的な働きかけに関するワークシート学習及び演習を実施した。

(4) 成 果

クラスの人間関係をよく知っている教員が実施することで、クラスに生じている問題への対策を焦点化し、生徒の意識に働きかけながら実施することができた。

このことにより、生徒一人一人が自分達の日常生活に照らしながら取り組むことができた。



4 これまでの取組の内容

2 スクールカウンセラーによる集団カウンセリング

(1) ねらい

他者との人間関係上のストレスを乗り越えることができるよう、ストレスに対処するためのスキルを身に付ける。

(2) 対象

第1学年生徒（34名）

(3) 内容

ストレスに関する講義を受け、各自のストレスとその対処法について振り返るとともに、クラスの仲間と人間関係上のストレスについて共有を図った。

(4) 成果

異なる中学校から進学した、生徒同士の人間関係上のストレスを抱えた生徒が多い集団を対象に、自分のストレスと上手く向き合い解消するスキルをトレーニングすることができた。また、クラスメイトと人間関係上のストレスについて共有することにより、自分と他者の違いを認め尊重し合うクラスづくりに役立てることができた。



5 次年度に向けて

1 成果

(1) 中途退学者数及び不登校生徒数の推移

中途退学者は前年度と同様で1名であった。不登校生徒は前年度はいなかったが、今年度は3名であった。

(2) その他の指標による評価

- ・第1学年の保健室利用者のうち、他者との違いを認められずストレスを抱えて来室する相談者が、前期から後期にかけて減少した。
- ・第2・3学年の保健室利用者のうち、友人との衝突やすれ違いで悩み相談しに来室する者が、前年度に比べ減少した。他者との適度な距離を掴めるようになった様子が窺える。

(3) 「ほっと」実施により把握した生徒のコミュニケーションスキルの概況及び生徒の変容した姿

【1学年】

7月調査より12月調査において、関係維持、仲間強化、自己統制の各領域の得点及び合計点が上昇した。入学時に比べ、周囲の状況を考えて行動しようとする傾向が見受けられた。しかし、宿泊研修（1月）で実施したコミュニケーションスキル育成のためのトレーニングにおいて、集団の中で自分の意見を発言するコミュニケーション能力に課題があることが明確となり、引き続きトレーニングを継続する必要がある。

【2学年】

平成28年7月調査と平成29年12月調査を比較すると、全ての領域の得点及び合計点が低下した。原因として、2年生に進級してから不登校となる生徒の存在や、進路活動において、目的が定まり積極的に学習に取り組む生徒とそうでない生徒との人間関係が背景として考えられる。

【3学年】

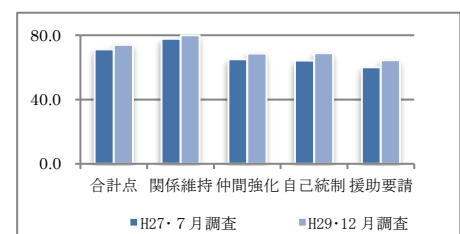
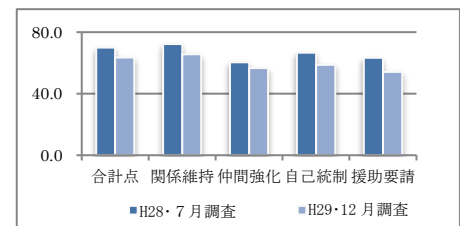
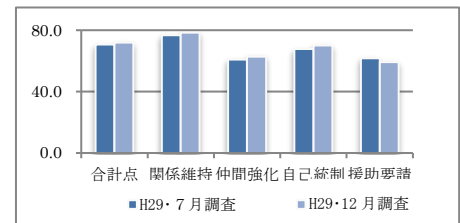
平成27年7月調査と平成29年12月調査を比較すると、全ての領域の得点及び合計点が上昇した。3年生になり、各生徒が進路実現に向けて活動する中で、仲間と励まし合いコミュニケーションをとることにより、仲間意識が高まり、互いを認め合う姿勢が育成された。

2 課題

- ・プログラム実施時には生徒の気付きに働きかけることができて、日常生活への継続性に課題がある。継続性を持たせる取組について検討する必要がある。
- ・対人関係における葛藤との折り合いを付けられずストレスに対処できなくなっていたり、無気力から不登校に陥るケースが解消されずにいる生徒もいることから、よりより人間関係構築を目指す取組や自己有用感を高める取組が必要である。

3 次年度に向けて

- ・プログラム実施時の生徒の気付きを日常生活へ継続させるため、体系的な取組が求められる。
- ・学校の課題に応じた継続的で柔軟な働きかけが求められる。



北海道函館中部高等学校

課 程： 定時制
学 科： 普通科
生徒数： 72名

1 取組の特徴

スクールカウンセラーによる構成的グループ・エンカウンター(以下SGE)を実施し、人間関係形成能力やコミュニケーション能力の育成を図ることを目的とする。2学年の宿泊研修では、進路意識の喚起を目的としたキャリアSGEのプログラムを実施している。

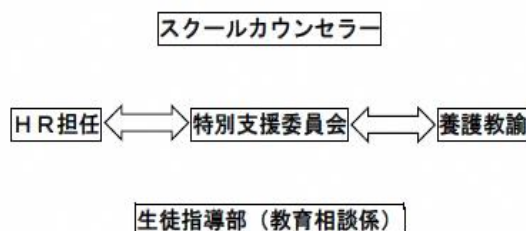
また、学級環境適応感尺度「アセス」の個人データを参考資料として、学校生活における悩みや不満の早期発見・早期解決を図り、教員と生徒の信頼関係を築く機会とすることを目的とする教育相談を年2回行っている。

2 取組のねらい

本校の生徒は「人間関係」で躓いた経験を持つ生徒も多く、自尊感情が低くなっている生徒も少なくない。また、様々な事情により十分な養育が得られず、家庭でのコミュニケーションも不足し、社会性が十分に育っていない生徒も少なくない。

入学以前の社会経験、人間関係での体験の少なから、ソーシャルスキル、コミュニケーションスキル、自己肯定感の低さが課題となっているため、本プログラムにより、良質なコミュニケーションの場を設定し、スキルの育成を図る。

<組織図>



3 取組の経過

- | | |
|------------------------------|-----------------------------|
| 4月・「アセス」実施①(全学年) | 10月・スクールカウンセラーによるSGE実施⑦(1年) |
| 5月・第1回教育相談(全学年) | 11月・スクールカウンセラーによるSGE実施⑧(1年) |
| 6月・スクールカウンセラーによるSGE実施①(1年) | ・スクールカウンセラーによるSGE実施⑨(1年) |
| ・スクールカウンセラーによるSGE実施②(1年) | ・スクールカウンセラーによるSGE実施⑩(1年) |
| 9月・スクールカウンセラーによるSGE実施③(2年) | ・スクールカウンセラーによるSGE実施⑪(3年) |
| ・スクールカウンセラーによるSGE実施④(2年) | ・「アセス」実施②(全学年) |
| 10月・宿泊研修で引率団によるキャリアSGE実施(2年) | 12月・第2回教育相談(全学年) |
| ・スクールカウンセラーによるSGE実施⑤(1年) | ・スクールカウンセラーによるSGE実施⑫(3年) |
| ・スクールカウンセラーによるSGE実施⑥(1年) | 2月・スクールカウンセラーによるSGE実施⑬(1年) |

4 取組の内容

1 スクールカウンセラーによる構成的グループ・エンカウンター

(1) ねらい

高校入学後できるだけ早い時期からエクササイズに取り組むことで他者と交流し、多様な考えや立場を理解する力を育成する。また、自分の考えを正確に伝えるとともに、自己の役割を果たしながら他者と協力・協働して社会に参画し、社会関係を積極的に形成することができる力を育成する。

4 取組の内容

(2) 対 象

1 学年～3 年生

(3) 内 容

スクールカウンセラーの指導による構成的グループ・エンカウンターを実施した。対象となる生徒の実態等を踏まえたプログラムとなるように、事前に担任から情報提供を行い、スクールカウンセラーが実施プログラムを決定した。実施後は、担任とスクールカウンセラーが生徒の活動の様子から、気付いたことを情報交換し、生徒指導やクラス経営の参考とした。

(4) 成果等

①ちぎり絵リレー(1 年)

スクールカウンセラーが出す課題を 1 枚の紙をちぎりながら(一筆書きのイメージ)、メンバー全員でリレーをして 1 つの形を完成させる。最初に取り組んだ作品と最後の作品の完成度を比較すると、作業におけるコミュニケーションが進んだことが見て取れる。相手の気持ちを想像しながら活動することで、ルールを遵守する態度やモラル、思いやりなどを育成することができた。



②ジェンガタワー(2 年)

グループ全員で協力しできるだけ高いジェンガタワーを完成させる。互いにアイディアを出し合い、他者の考えを尊重する意識や協力して一つの事に取り組む意識を育成することができた。また、宿泊研修直前の日程であったため、集団活動への参加のモチベーションを高める機会とすることができた。

③進路学習のための双六(3 年)

各双六の目に記載された 25 才までに起こりうる出来事と自分の選ぶであろう行動を予測し、駒を進めて行く。生徒の感想として「進路についてもっと知りたくなった」「社会人になって起こるかもしれないことを知ることができて良かった」「日頃、あまりしゃべらない人とも話せてよかった」といった内容があげられていた。

2 宿泊研修におけるキャリアSGE

(1) ねらい

- ①人間関係上のトラブルを予防する力を育てる。
- ②人間関係構築能力が身に付ける。
- ③進路に向けて職業意識を高める。
- ④職業観を広める。

(2) 対 象

2 学年

(3) 内 容

①ウォームアップ(緊張感の軽減)

- a. 10回じゃんけん b. パースデーライン

②だまし絵

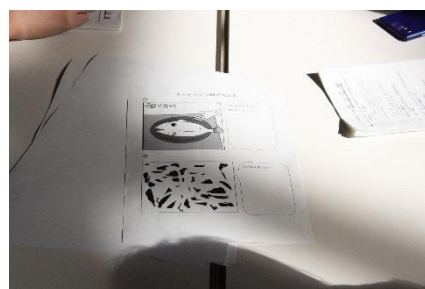
コミュニケーションの取り方を考える(メラビアンの法則からメールだけの伝達がトラブルになる理由を考える等)

③カード式職業選択

カードを使って、沢山の職業の中から自分の興味がある仕事を選ぶ活動を通して、将来の職業について考える取組。

(参考)

『実践サイコエデュケーション』図書文化
(日本教育カウンセラー協会キャリアSGE実習資料)



4 取組の内容

(4) 成果等

表 1. 宿泊研修前後での気持ちの変化

平均得点(最小 1・最大 10)	前	後	差
(1)最初に学校に集合した時の緊張度	4.65	3.65	-1
(2)あまり話したことがない人がいるなあと感じた度合い	3.65	3.12	-0.53
(3)自分がこの宿泊研修を楽しくやっていたいけるかという不安	3.41	2.53	-0.88
(4) 宿泊研修が楽しく感じられる気持ち	4.71	4.94	0.24

表 2. キャリアSGEの感想:()内は回答者数

- A あなたは、実習は楽しかったですか。
 ①楽しかった(6) ②少し楽しかった(4) ③どちらとも言えない(4)
 ④あまり楽しなかった(3) ⑤楽しなかった(0)
- B あなたは、これからクラスの仲間と楽しくできそうですか。
 ①できる(8) ②少しできる(2) ③どちらとも言えない(6)
 ④あまりできない(1) ⑤できそうもない(0)
- C あなたは、今日のような実習を、またしてみたいですか。
 ①思う(5) ②少し思う(3) ③どちらとも言えない(4)
 ④あまり思わない(3) ⑤思わない(2)

宿泊研修前後での気持ちの変化を見ると、集団活動に対する抵抗感の軽減が見られた(表1)。日頃から集団への不適応感を持ってクラスで過ごしている生徒が、宿泊研修へ不安を克服し、「なんとかできた」と達成感を得ていることがうかがえ、宿泊研修が生徒の成長を促す場となったことが推測される。キャリアSGEの感想についてはA・Bについては半数以上が肯定的な評価であった(表2)。

キャリアSGEを取り入れた理由としては、生徒の多くが過去の失敗をひきずり、将来への希望や職業観を持ってないでいる状況にあるからである。自由記述に「自分の知らない職種ばかりだった」「自分の将来への考えがいかにか浅いか再確認した」という内容もみられ、「感じ方・気づき」に個人差はあるものの、「進路選択」「進路実現」への意識を喚起する機会となった。「できる・できない」の視点ではなく「何をしたいのか・どうなりたいのか」と考える場面を設定することや、キャリアに関わる情報の提供は今後も必要と考える。



5 次年度に向けて

1 成果

(1) 中途退学者数及び不登校生徒数の推移

中途退学者：平成28年度10名 ⇒ 平成29年度2名

不登校生徒：平成28年度0名 ⇒ 平成29年度3名

(2) その他の指標による評価

保健室年間利用者数：平成28年度延べ365名 ⇒ 平成29年度延べ297名

(3) 「アセス」実施により把握した生徒のコミュニケーションスキルの概況

4月当初に比較し、11月のアセスでは生活満足感の上昇、他者や社会への肯定的感情の醸成が計測された。

(4) 生徒の変容した姿

1年生から多くの生徒が生徒会役員選挙へ立候補するなど、学校生活へ意欲的に取り組もうとする姿勢が見られた。

2 課題

SGEなど他者とのエクササイズを負担に感じる生徒への配慮が必要とされる。

3 次年度に向けて

個々の生徒状況をより綿密に分析し、全員が無理なく参加できるプログラムを計画、実施する。

北海道函館工業高等学校

課 程： 定時制
学 科： 工業科
生徒数： 59名

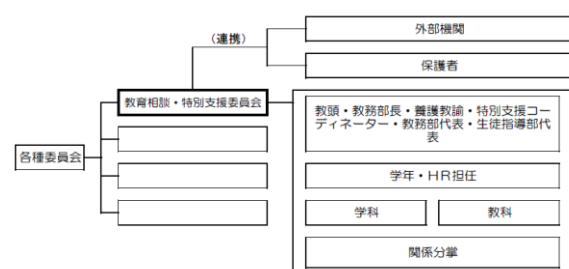
1 取組の特徴

1、2学年において、集団に適応できるよう構成的グループエンカウンターなどを用いて、早期から「安心かつ安全なHRづくり、学年づくり」を目指している。また、予防的・開発的教育相談の手法を学ぶ校内研修を多く実施している。

2 取組のねらい

近年、本校には中途退学経験者やいじめ等を要因とする不登校経験者、発達障がい診断を受けた者など様々な事情や動機を持つ生徒の入学が増えている。心の不安や悩みを抱える生徒も多く、教育相談体制の一層の充実が喫緊の課題である。生徒が他者との人間関係を構築しながら困難を乗り越え、社会で生きていく力を身に付けることをねらいとしている。

<組織図>



3 取組の経過

5月 「ほっと」、「Q-U」(1, 2学年1回目) 校内研修会「特別な配慮が必要な生徒の理解と支援」
6月 SGE プログラム「遠足に向けた人間関係づくり」(1学年)
SGE プログラム「コミュニケーション」(2学年)
7月 校内研修会「教育相談について」

9月 校内研修会「リソース探しのポイント」
10月 講演会「今、これから」
学級 SGE「学校祭の振り返り、リソース探し」(1, 2学年)
12月 「ほっと」、「Q-U」(1, 2学年2回目)
体育大会のリソース探しとその還元について(1, 2学年)

4 取組の内容

1 1、2学年におけるSGEプログラム

(1) 遠足に向けた関係づくり

ア ねらい

クラスの交流を深めるアプローチを通して、生徒間の距離感を近くなる。

イ 対象

1学年

ウ 内容

SGE 学習プログラム「ひたすらジャンケン」、「あいこジャンケン」、「ボウリングジャンケン」、「キトリス」



【SGE プログラムの様子】

4 取組の内容

エ 成 果

昨年度までは2学科あったため、学科間交流を実施してきたが、今年度より1学年が1学科となったことから、クラス内の交流を深めることを目的として実施した。各学習プログラム終了後に生徒の変容を確認するため「ふりかえりシート」に生徒へ感想等を記入させた。プログラム実施後、「みんなと交流できてよかった」、「名前を教えることで距離が近くなったような気がした」、「手のふれあいだけで、今日学校に来たときよりもクラス全体がやりやすくなったと思う（話しやすくなった）」、「いろいろな人と交流ができて、よいことができたと思う。楽しく活動できたと思う」、「最初は自分からあまり行くことができなかったが、少しできるようになった」などの感想が得られたことから、所期のねらいを実現することができたと考ええる。

(2) コミュニケーション

ア ねらい

学年の交流を深め、生徒のコミュニケーションスキルを高める。

イ 対 象

2 学年

ウ 内 容

「バースデーライン」、「自己紹介」、「他者紹介」、「無人島 SOS」を実施



【宿泊研修での SGE プログラムの様子】

エ 成 果

宿泊研修中の取組として、学年の交流を深めること及びコミュニケーションスキルを高めることを目的として実施した。各プログラム終了後に生徒の変容を確認するため「ふりかえりシート」に生徒へ感想等を記入させた。「身振り手振りだと伝わりにくいのがよく理解できた」、「みんなと力を合わせる大変さが改めてわかった」などの感想が得られた。プログラム実施後の感想としては、「集団行動をあまりしないのでこのような研修は大切だと思った」、「チームワークの大切さがよくわかった」などの感想が得られたことから、所期のねらいを実現することができたと考ええる。

2 スクールカウンセラーによる講演会

(1) ねらい

講演会により生徒の自己肯定感を高め、他者とのよりよい人間関係づくりができる。

(2) 対 象

全校生徒

(3) 内 容

演題：「今、これから」

講師：北海道公立学校スクールカウンセラー
西谷 卓也氏



【SCによる講演会の様子】

(4) 成 果

ストレスマネジメントや自己肯定感、今を受け入れることについて講演していただいた。講演会終了後の生徒の感想として、「自分にとって参考になる講演であった」、「機会があればまた聞きたい」、「もっといろんなことにチャレンジしてもいいと思った」、「失敗はだめということではないのを確認できた」など、講演会を機に今後の学校生活に向けて前向きな感想が多く、自己肯定感が高まり、他者とのよりよい人間関係づくりができるきっかけとなった。

5 次年度に向けて

1 成果

(1) 中途退学者数及び不登校生徒数の推移

平成 28 年度 中途退学者数 9 名 平成 29 年度 中途退学者数 7 名

(2) その他の指標による評価

保健室利用者数（延べ人数）

平成 28 年度 264 名 平成 29 年度 207 名

(3) 「ほっと」実施により把握した生徒のコミュニケーションスキルの概況

第 1 学年について、要素偏差値が低い項目については、1 回目は 13 項目中 10 項目であったが 2 回目実施では 4 項目となった。また、2 回目実施では 13 要素のほとんどの項目において偏差値の上昇が見られた。特に「率先」、「学業」、「相談」の項目において上昇が著しい結果となった。また、因子得点においては、「仲間強化」、「援助要請」において数値が著しく上昇した。学年全体の人数が少ないが、因子得点の「仲間強化」においては、学年の 7 割以上の生徒に数値の上昇が見られた。第 2 学年について、要素偏差値が全ての項目について昨年度の 1 回目実施から偏差値の上昇が見られた。特に、「配慮」及び「拒否」に関して、偏差値の上昇が顕著に見られた。

以上のことから、授業や行事、HR 活動等を通して他者と関わりを持つ働きかけを行ったり、構成的グループエンカウンターに取り組んだりすることで、自分を表現したり、周囲と関わり合ったりすることに喜びや楽しみを感じ、望ましい人間関係の構築に向けたコミュニケーションスキルの向上に対して、前向きな意識が少しずつ芽生えてきていることがうかがえる。さらに 2 学年においても、コミュニケーションスキルを育成するためのトレーニングやコミュニケーションスキルを生かす機会を確保していくことで、周囲に対する配慮や援助ができるようになることと合わせて、無理なことについては断ることができる能力などが着実に向上していることがわかった。

(4) 生徒の変容した姿

1 学年においては、入学当初は意思表示が苦手な生徒が多かったが、学校行事や多くの活動を通して、徐々に意思表示ができるようになってきた。また、SGE 学習プログラムにおいてコミュニケーションの大切さについて理解することができ、意思表示が活発になっていくことによりクラスの仲間意識の向上にもつながった。2 学年においては、昨年度実施した内容を踏まえて今年度のプログラムを継続して実施した。集団生活の大切さ及びコミュニケーションの大切さを改めて確認することができ、特に、「配慮」及び「拒否」に関して、偏差値の上昇が顕著に見られたことから、無理なことについては断ることができるなどの能力が着実に向上し、HR 活動においてクラス全体が積極的に活動できるようになってきた。

2 課題

「ほっと」の分析結果の推移では、1 学年においてほとんどの項目で偏差値の上昇が見られたが、個々の結果においては、極端に数値の低い生徒が見られるため、生徒のコミュニケーションスキルの更なる向上に向けて、トレーニングの質を高めていくことが望まれる。2 学年においては、「緊張」の数値が大きく下がっており全体的にも伸び悩んでいる。この原因を分析し、学年に合った取組を検討し継続していくことが必要となる。また、2 年間実施した校内研修会によって高められた教職員の生徒理解や指導法に対する知識を、組織的かつ効果的に生徒に還元できる方法を検討していく必要がある。

3 次年度に向けて

「ほっと」および「Q-U」の実施を継続し、分析結果から得られる生徒個々の課題を全教職員が共有し、生徒への具体的な指導に活用していくシステムを構築する。また、「工業高校」である本校の特色を生かし、日常の授業や実習の場面を最大限活用するなどしてコミュニケーションスキルの育成を図るとともに実践できる機会を確保していく。